

## 外国人とともに地域防災を考える ～新潟県柏崎市の事例として～



公益財団法人柏崎地域国際化協会 事務局長  
清水 由美子

柏崎市は新潟県のほぼ中央部に位置し、日本海に面した42kmに及ぶ海岸線と、米山・黒姫山・八石山・西山連峰など有しており海と山に囲まれた人口9万人弱の市である。

柏崎地域国際化協会は職員2名パート職員1名の団体で、人口比0.9%の外国人の住む地域において国際化を進めている。

### 中越沖地震の避難所巡回 ～柏崎多言語支援センターの活動

震災発生日は海の日で家にいた。ほんの10数秒くらいだっただろうが、ぐらぐらミシミシと家が揺れたかと思うと雪国特有の黒くて太い梁が目の前に落ちてきた。同時に漆喰壁がどさっと落ち、居間にいた家族の頭上に覆いかぶさった。もうもうと土煙が舞い一瞬真っ暗になったが、壁の割れ目から光が漏れていて空気も感じ「生きていられる」と思った。どうにか隙間から外に出てみると一階の屋根だった。そのころには町内の人も出てきていて私は「レスキュー呼んでください」と叫んだが、数分後に「何回消防にかけてもつながらない」との返事だった。怖さと不安が増したが次の余震でもっと崩れるかもしれないので3歳の孫から90歳の義母まで全員をなんとか暗闇から救出した。パニックになりそうな心を必死で抑えた。

その日の午後、市職員から「大変なときに申し訳ないんだけど、県が多言語センター作るっていうから明日打合せに出てもらえないか」という電話があった。そこで我に振り返りやっとなんか仕事を思い出し、留学生会の会長や外国人の友人に携帯からメールを入れた。数

日後にみんな大丈夫ですと返事がきた。

翌日、生涯学習センターの中にある協会事務局で県・市の担当者と「多言語センターをどう設置運営するか」を話し合った。県国際課員と中国・ロシア出身の国際交流員が地元FMラジオ局に行き、地震の状況や今後の注意点など、英・中・露語での多言語放送をした。その日の夜、長岡市で県国際課・長岡国際交流センター長・多文化共生センター大阪代表と運営をどうするかについて話し合いがもたれた。これが柏崎災害多言語支援センターの始まりである。

その打合せの結果、多言語支援センターにはJICA国際緊急援助隊に関わる方がボランティア休暇で駆けつけてくれ、多文化共生センター東京の職員と共に活動の基礎を作ってくれた。私の最初の仕事は国際担当課長に頼んで、協会のある生涯学習センター館長に多言語支援センター設置を願い出してもらうことだった。そのとき館長から「避難所が拡大されたら出てもらいますよ」と言われた。次に市内に防災無線で流れている情報を協会にFAXで送ってもらうよう段取りをつけた。市内は停電中であったが、幸い電気は使えた。

こうして新潟県設置民間運営の形ができた。運営の部分はJIAMの研修で顔の繋がっている多文化共生マネージャーが期を越えて参集してくれた。今冷静になって考えてみると、公務ではなく休暇を取って来てくれた方も多く、余震などにより事故があったらと思うと背筋が寒くなる。ある県の職員（この人も多文化共生マネージャーだと思うが）の「柏崎のボランティアは何をやっているんだ。遠くからこ

んなに來ているのに」ということばには涙が出た。また、協会の文具備品が足りないと思ったのか、備品庫を確かめもせず、地元の文具店にバインダーや胸に貼るカラーガムテープなどを勝手に発注していた。「誰がこの代金を払うのか」と聞くと「協会で」との返事。さっそく注文を取り消した。

ボランティアに助けられたのも感謝すべき大きな事実だが、振り回されて心がしぼんだのも事実である。支援に來ましたと言って被災地の状況の写真だけ撮って帰った人もいる。自分の目的のために車を出せと言った人もいる。被災地では職員も被災者であることを忘れてる。地元のボランティアや日本語の先生たちが集まってくれたのは約1週間後の土日であった。実家が全壊、事務所が混乱、親戚が被災など、1週間はその対応に追われていたのだ。自分の目的だけで來るボランティアや団体に所属していないボランティアはお断りした。「若いの送るから、教育してやってくれ」という申し出もお断りした。

多言語支援センターの1日はミーティングで始まる。前日の活動内容・引継ぎ事項を確認し、情報の収集に移る。対策本部からの山のようなFAXから、外国人被災者に必要だと思われる情報の取捨を始める。そして翻訳を地元以外の団体にお願いする。これは県の協会が窓口となってくれた。

外部に出すにあたっては集落の呼び名に神経を使った。交通情報で曾地SOCHIがSOJIになっていたことがあったからである。音声表記の文字では別の地域になってしまう。翻訳依頼で失敗した事例がもう1つある。避難所に設置された全自動洗濯機の使い方が分からないと私の住む避難所のフィリピンの人から言われて対応した例である。使い方を聞くと避難所担当者は「壁にあるでしょ」と分厚い取扱説明書を指差した。その中から簡単操作のページを見つけ出し、それを翻訳依頼に出した。ここで誤解が生まれた。ここでは水道は使えないという事実を他の地域の人も知っ

ているとの思い込みから、そのことを伝えなかった。翻訳者からは「スイッチを押す。終わったら洗濯物を取り出す。全自動ですからそのまま終わるまで触らない」という翻訳が返ってきた。実際には被災地では水道が使えないため、何回も水くみをくり返さなければならず、大変な手順が必要だったのだ。そこで避難所にいる娘が使い方を絵で描いて壁に掲示した。翌日にはフィリピンの人が避難所のお年寄りに洗濯機の使い方を教えている光景を目にした。

避難所の巡回では母語で話すことで相手が安心した顔つきになるのを感じた。被災者からは「古くてもいいから母語の新聞が読みたい」「食べ物が合わない」などの要望があり、古い新聞を取り寄せ、避難所本部に七味とうがらしなど調味料を置いてもらう手配をした。ことば以外の様子にも気を配った。大きな問題が起きなかったのは毎日人が変わっても巡回をしたからだと思っている。FM放送での多言語放送も震災後3週間ほど続けた。





**財団法人 柏崎地域国際化協会**  
KASHIWAZAKI AREA INTERNATIONAL ASSOCIATION

2011年3月29日(火)

Top Page	協会の紹介	イベント情報	語学文化講座
Living Guide	多言語相談窓口	活動報告	協会ニュース
			日本語教室 入会のご案内



平日 9:00 - 17:00

〒945-0051  
新潟県柏崎市東本町1-3-24  
市民プラザ2F  
Tel&FAX :0257-32-1477  
E-mail :kita2006@kismet.or.jp

Access Map




添付サイト

**◆ 柏崎多言語支援センター・柏崎多言語支援中心**  
Kashiwazaki Multilingual Center

003 柏崎市内の水道水の調査では、放射性物質は検出されていません。安心して使用してください。  
Kashiwazaki City is monitoring the tap water, the radioactive material has not been detected. Tap water is safe to drink. かしわざきの すいどうのみずをげんさしました。みずはのめえます。  
柏崎市の自來水水质検査結果。没有发现放射性物质。自來水可以安全饮用。  
Sa gripo ng tubig Kashiwazaki lungsod ng pagsubok, ang mga radioactive na materyales ay hindi nakita. Gripo ng tubig ay ligtas na inumin.

002 相談窓口：柏崎市役所101会議室、午前9時から午後4時  
Consultation Desk: Kashiwazaki City Hall 101 Kaigisitsu 9 a.m to 4p.m.  
しんばいしていることをきいてくれるところ：かしわざきしやくしよ101かいぎしつ 9じから4じまで  
咨询窗口：柏崎市政府101会议室 从上午9:00至下午4:00  
Tanggapin para sa pangungusala: Kashiwazaki City Hall 101 Kaigisitsu 9 a.m to 4p.m.

001 柏崎刈羽周辺の放射線測定結果は特に変わりなく、平常の値となっています。なお、異常な値が確認された場合はただちにお知らせします。  
Niigata prefecture measure the radiation leaks continually, the radiation level is low in Kashiwazaki Kariwa area.  
にいがたけんは かしわざき・かりわで ほうしやせんのみつよさを、はかっています。いまはあんぜんです。またおしらせします。  
新潟県正在连续测定柏崎市刈羽周辺の放射線。现在测定的結果是通常值没有异常变化。若确认有异常值时,马上通知。

◆ 東北地方太平洋沖地震についての多言語情報  
じしんについていろいろなことばでのじょうほうEarthquake information in multilinguals

(特活) 多文化共生マネージャー全国協議会のホームページをご覧ください。  
◆ ニュージーランド地震・オーストラリア洪水救援基金のお願い

ニュージーランド・クライストチャーチの地震の基金活動をしています。また、昨年スタディツアーを実施したオーストラリア・ブリスベンの洪水被災地救援のためにご協力お願いいたします。  
口座・基金箱を設置いたしましたので、皆様の温かいお気持ちをお寄せください。

### 東日本大震災直後の対応 ～柏崎多言語支援センターとしての動き

東日本大震災及び福島原子力発電所の事故により被災者が柏崎に避難してくることになり避難所が設置された。センターでは外国人避難者がいないかどうか巡回した。外国人避難者が1人いると報告を受け向かったが会えなかったため、放射能調査の情報と「水は安全です、飲めます」ということを多言語にしたものを許可を得て壁に掲示した。多言語情報は災害対策本部にも渡し、避難所にある情報を更新してもらうことにし巡回の必要はなくなった。実際に被災していない避難所では電気は正常なので、協会のホームページで巡回した時に配った情報や全国的な多言語支援組織・多文化共生マネージャー全国協議会が発する情報を紹介した。

JIAMに本部を置いていた「多文化共生マネージャー全国協議会」と息子と仲間が開いてくれた「多言語災害情報ツイート・言葉は決して壁じゃない」の2つをホームページに載せた。私が「災害のとき言葉は壁になる」

と言っているのを聞いていて、バナーの名前を思いついたとのことだ。

### 総合防災訓練で外国人住民と一緒に 行っている多言語支援活動研修

全国から支援してもらった体験を地域に引き継ぐと、震災から2年後の2009年から毎年外国人住民と一緒に防災訓練に参加している。避難所訓練で、名前と住所は日本語で言っても「町内会は」と聞かれて答えられないことが分かり、日本

語教室でも年に1回は防災日本語と町内名を確認することを入れてもらっている。多言語支援センター長を市担当者として3年目には多言語支援の認識も上がり、テントと多言語支援センターの看板・情報掲示板もしっかり用意してもらうまでになった。

この多言語支援訓練は「なぜ多言語情報が必要か」ということを一緒に考える座学と実際に現地に出向いて翻訳や巡回などをする2回講座である。訓練に参加することで他組織との連携も発見できた。NTTが隣のテントだったので、災害伝言ダイヤルの使い方を訓練の一環としてボランティアの言語で翻訳し





てみた。しかし海外からは使えないと分かり、災害時には海外からの問い合わせが多い事実を伝えた。現在はWEB171を海外からも使えるようになってきている。



## 外国人に関する問題「5つの壁」

災害時には以下のような問題が増幅拡大することをしておくことが必要である。

1. ことばの壁→多言語情報を渡す。
2. 文化の壁→宗教・生活習慣・食事などの情報を日本人社会にも伝える必要がある。
3. 経験の壁→過去の自然災害・避難訓練が経験値としてあるかどうか。地震のない国の出身者もいる。
4. 制度の壁→日本の法律や規定・ビザについての知識と、不利にならないような配慮が必要となる。
5. こころの壁→外国人への偏見。震災直後は寛容でも、日を追うごとに偏見が強くなったりする。

この5つの問題を踏まえて、この壁を低くするために言語通訳と共に日本人と外国人に

対して、日本との習慣や考え方の違いを話し分かってもらうために文化通訳が必要なのである。

## 災害時外国人支援のポイント

- ・まずは「やさしい日本語」で話しかけてみる。外見では何語を話せるか分からない。
  - ・支援を等しく受けられるようにする。多くの支援は自分から申請しないと恩恵を受けられない。そのためには選んだ必要な情報を多言語化することと、やさしい表記の日本語にする必要がある。しかし何でもかんでも多言語にという意味ではない。伝える側は情報を選択する経験も知識も必要となる。
  - ・「5つの壁」を踏まえた対応をする。情報を渡すことで現状を判断できるし安心につながる。
  - ・要援護者から頼もしい支援者へ。情報をもとらえたら、今後は伝える側、支援する側に立てる。
  - ・平時から多文化共生社会の形成を。災害が起こる前から顔が繋がり存在が分かっている助けたり、助けてもらったりの関係を作ることができる。何かあったら、お互い顔を思い浮かべられる関係になれる。
- せっかく縁があってこの地域に住んでいる人と価値観を認め合い、お互いを尊重できるような心で、社会を一緒に作っていきたいと考えている。

### 著者略歴

清水 由美子 (しみず・ゆみこ)

地域での各種世界大会の通訳ボランティアを務めた後、1991年に新設された柏崎市役所の国際交流推進室の嘱託となる。1996年柏崎地域国際化協会が設立され、市の嘱託として業務に関わる。2003年の財団法人、2011年の公益財団法人への組織替えに従事。2003年より現職。地域の国際化を進め、国際理解・多文化共生の意識の涵養に努める。2007年新潟県中越沖地震の際は、自宅が全壊した被災者であったが、全国からの人的支援を受け、柏崎災害多言語支援センターの活動を行った。